

1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語¹

三浦清美・平野智洋

〈はじめに〉

翻訳の底本について

1204年の第4回十字軍によるコンスタンティノーブル征服をめぐるロシアの物語は、おそらくは事件を直接に目撃したロシア人によって書かれた。この物語のもっとも古いテキストは、ノヴゴロド第1年代記シノド本において読むことができる。写本においてこのテキストが現われる部分は、13世紀に書かれたと考えられている。中世ロシアにおいて、写本制作の年代が、そこに収められた作品が書かれている時代とわずかにしか変わらないことはまれであるが、この物語はそうした数少ないケースの一つである。この物語はほかの年代記集成、ことに、世界史の叙述を含むエリンスキイ年代記第2編纂本にも組み入れられている。

ロシアの作家によるこの作品の叙述は、生き生きとしたディテールをたくさん含んでおり、興味深く価値が高い。この作品の作者は、ビザンツの歴史家ニキタス・ホニャティス²による諸事件の詳細な記述を補完する役割を果たしている。

¹ Повесть о взятии Царьграда крестоносцами в 1204 году (Подготовка текста, перевод и комментарии О.В. Творогова) // Библиотека литературы Древней Руси. Т. 5. СПб. 2000. С. 66-73, 460-461. 本稿は、『電気通信大学紀要』、『エクフラス』、『Slavistika』、『古代ロシア研究』に連載されてきた「中世ロシア文学図書館」シリーズの第11集として刊行されるものである。本文、O.B. トゥヴォローゴフによる解説（〈はじめに〉翻訳の底本について）、注の翻訳は、三浦清美がおこなった。トゥヴォローゴフによる注は、Творогов В.О.と注記した。「〈解題〉第4回十字軍の記録としての『ツァリグラード征服の物語』」、そのほかの注は、平野智洋による。すべての文責は三浦清美が負うものとする。この作品には、英訳がある。J. Gordon (trans.), "The Novgorod Account of the Fourth Crusade," *Byzantion* 58 (1973), pp. 297-311.

² 1217年没。小アジア出身のビザンツ帝国高官で、コムノス朝（1081-1185）およびアンゲロス朝（1185-1204）の歴代皇帝に仕え、1195年には当時の文官最高位、諸局長官（*logothetis ton sekretou*、後の国務長官 *megas logothetis*）に就任した。アレクシオス5世（位1204）が登極すると離職し、第4回十字軍後に家族とともに帝都を脱出して小アジアのニケアに亡命し、そこで歴史著作『年代詳説』を書き上げた。同書は1118-1206年間の諸事件を扱ったビザンツ史の一級史料であり、第4回十字軍のビザンツ側目撃証言としても価値が高い。ホニャティスのテキスト及び英訳は、*Nicetae*

このテキストの校訂、注釈をおこなった O.B. トヴォローゴフは、『ノヴゴロド第 1 年代記』のシノド本によるテキスト (Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. / Под ред. и с предисловием А.Н. Насонова. М.-Л., 1950) をベースにして、同年代記委員会本, Н.А. Мешчелюскии の論文「1204 年のフランク人によるツァリグラード征服の物語」(ТОДРЛ. Т.Х) によって補正をおこなった。

〈解題〉

第 4 回十字軍の記録としての『ツァリグラード征服の物語』(平野智洋)

第 4 回十字軍によるコンスタンティノーブル占領 (1204 年) に関する同時代記録には、ビザンツ側記録、ニキタス・ホニャティス (Nikitas Choniatis) 『年代詳説 (歴史)』(*Chroniki Diigisis*) 或いは十字軍参加者の記録、ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン (Geoffroi de Villehardouin)³ とロベール・ド・クラリ (Robert de Clari)⁴ それぞれによる同題名の『コ

Choniatae Historia, recens. I. A. van Dieten, v. I-II, Berlin- New York, 1975 (CFHB 11) (以下, *Choniates* と略記) ; H. J. Magoulias (trans.), *O City of Byzantium, Annals of Niketas Choniates* (Detroit: Wayne State University Press, 1984). 彼の経歴については, Magoulias. *Choniates*, pp. ix-xvi; A. P. Kazhdan (ed. in chief), *The Oxford Dictionary of Byzantium* (Oxford: Oxford University Press, 1991) (以下, *ODB* と略記), p. 428.

³ フランス王国東部シャンパーニュ伯領出身の騎士。伯領家令 (*maréchal*) 職を長く務め、主君であるシャンパーニュ・ブリー伯ティボー 3 世とともに十字軍に参加した。ティボー 3 世死去 (1201 年) 後は新たな十字軍団長にモンフェラート侯ボニファッチョを推挙するなど十字軍中でも重鎮の地位を占め、ラテン帝国成立後も同地に留まって要職を務めた。『コンスタンティノーブル征服記』の著者としても知られている。同書は 1197-1207 年間に扱い、主として十字軍の結成と行程、コンスタンティノーブル征服までの軍事的事件、ラテン帝国成立初期の動向を記している。この書は、十字軍指導者によるいわば「公式記録」として、十字軍内部の詳細な動向と戦闘の正確な記録を伝える十字軍側の一級史料であるが、その一方で、ビザンツ側に対する偏見・敵意に満ちた叙述も含まれる。彼の著作には以下の日本語訳がある。ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥアン (伊藤敏樹訳) 『コンスタンチノーブル征服記』講談社学術文庫, 2003 年。彼の経歴については, *ODB*, 2169; ヴィルアルドゥアン『征服記』338-343 頁。

⁴ 十字軍中枢の一人であるサン・ポール伯ユージュの家臣アミアン領主の従臣 (騎士) として十字軍に参加し、コンスタンティノーブル征服後に多数の不朽体 (聖遺物) をフランスに持ち帰った。『コンスタンティノーブル征服記 (遠征記)』の著者としても知られている。同書は 1143-1216 年を扱い、コムノス時代のビザンツ帝国と西欧人の関係、十字軍遠征から第 2 代ラテン皇帝アンリの治績までを記している。ヴィルアルドゥアンとは対照的に一騎士、従軍者の視点から描かれた遠征記であり、現地情報を含めてかなり不正確な風聞をそのまま伝えているなど、正確性・客観性に関する問題はあるものの、重要な史料として位置づけられている。同書にも日本語訳がある。ロベール・ド・クラリ (伊藤敏樹訳) 『コンスタンチノーブル遠征記』筑摩書房, 1997 年 (以下, クラリ『遠征記』と略記)。彼の経歴と著作に関しては, 同書 199-207 頁。

ンスタンティノーブル征服記』(*La Conquête de Constantinople*) など、双方の当事者による記録が主要史料に分類される。⁵ ロシア語の記録『1204年の十字軍によるツァリグラード征服の物語』は、第三者視点から事件を描写し、当事者記録とは異なる独立史料のカテゴリーを形成する。

その記録は比較的短い、「逸脱した」十字軍の記録を、その背景としてのビザンツ帝内紛に遡って説明している。弟イサアキオス 2 世アングロス (Isaakios II Angelos, r. 1185-1195, 1203-1204) を陥れたアレクシオス 3 世アングロス (Alexios III Angelos, r. 1195-1203) の登極、伯父を欺いて脱出したイサアキオスの息子アレクシオス 4 世アングロス (Alexios IV Angelos, r. 1203-1204) の西欧逃避行と十字軍との接触が順に述べられる。他方で、『物語』は、十字軍遠征に出る者達に対する教皇 (インノケンティウス 3 世—その名は記されていない) とドイツ王フィリップ (Philipp, r. 1198-1208) の「ツァリグラードと戦わないように...ギリシア人の国に危害を加えてはならない」という指令 (教皇と皇帝の統一指令は明らかな錯誤—訳註 21) を、そして、十字軍士達が欲得の為にその指令を無視したことを伝え、これらを事件の枠組みとして据える。

軍事的な事件としての十字軍コンスタンティノーブル攻撃について、『物語』の記録は概ね正確であり、ホニャティス、ヴィルアルドゥアン、クラリなど他史料との整合性も保たれている (注 49)。1204 年 4 月 9 日の攻撃失敗、主日を置いて 3 日後、4 月 12 日の総攻撃という時間的経過、艦艇を用いた海側城壁、特にエヴェルゲティス修道院 (本文中では「ヴェルゲティスという名の聖救世主聖堂」) 隣接区域への兵力集中、登城梯子等攻城兵器の使用と十字軍士の城内突入、防衛側の逃亡、という戦況推移についても簡便ながら正確な記録を取っている。

また、政治的事件推移についても、ホニャティスにあつて十字軍側には見られない事件、例えばアレクシオス 4 世が細工を施した木樽に潜んで帝都を脱出したというエピソードや、十字軍の要求に不満を抱いた市民による対立皇帝ニコラオス・カナヴォス (Nikolaos Kan(n)avos) 擁立とアレクシオス 5 世ドウカス・ムルヅフロス (Alexios V Doukas

⁵ このほか、従軍者の記録としてサン・ポール伯ユーグの書簡、十字軍全体の提唱者、教皇インノケンティウス 3 世の書簡集および『行状記』、また二次史料としてシトー会修道士ギュンター・フォン・ペリスの『コンスタンティノポリス史』 (*Historia Constantinopolitana*) などラテン語、フランス語、イタリア語の史料が知られている。D. E. Queller, *The Fourth Crusade: the conquest of Constantinople, 1201-1204*, (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1977), pp. 219-222. インノケンティウス 3 世とサン・ポール伯の書簡、『ハルバルシュタット司教行状記』 (*Gesta episcoporum Halberstadensium*) ほか短篇史料の英訳拾遺集が刊行されている。A. J. Andrea, *Contemporary Sources for the Fourth Crusade* (Leiden: Brill, 2008).

Mourtzouphlos, r. 1204) による投獄といった事件も収録されている。これらの記録は、上記の軍事記録と合わせ、少なくとも著者が同時期コンスタンティノープルに滞在し直接状況を検分したか、或いは本文に登場する防衛側従軍者ヴァランギーワリヤグ兵（スカンディナヴィア出身者を中心に、広く北方、ロシア・ウクライナ出身者も含んでいた）などへの取材に基づいて、状況をかなり正確に把握していることを一つの特徴として挙げ得る。⁶

他方で、カナヴォス同様に市民が擁立を試みた「ラディオス」なる人物や、復位したイサアキオス 2 世と息子アレクシオス 4 世との対立の中で息子が父に向かって言い放った「あなたは目が見えません...私こそが皇帝です」といった発言等、『物語』の独立証言もいくつか存在する。これらについては、興味深い状況描写である一方、その真正性についてはなお問われるべきものであると言える（注 32, 35）。

とりわけ、逃亡前にアレクシオス 3 世が弟イサアキオスの許を訪れて述べたとされる、「弟よ、この様な仕打ちをしたからには、私を許すがよい。これがお前の望んだ帝位だ」という言葉は、様々な文献⁷ に引用され、この人物についての印象的な挿話となっている。ただし、この挿話は、逃亡計画を誰にも告げず、悟られることなく成功したというホニャティスの記録（注 26）とは矛盾しており、恐らく著者による創作であろうと思われる。またイサアキオス帝の死去と死因についても他史料との不整合が見られる（注 33）。

そして、最も重要な本書の特徴は、恐らくコンスタンティノープル陥落の悲劇性が何処に表れたかという点、そしてその原因を含めた総括にあらう。陥落後にコンスタンティノープル市民を襲った悲劇については当事者の一人ホニャティスが詳細に、切々と述べている（注 68）。また「略奪者」となった十字軍士達が得た富の莫大さについては、ヴィルアルドゥアンとクラリが誇らしげに書き立てている（注 64, 66）。これらの記録に対し、陥落後の状況について本書が述べ立てているのは、これまで帝都で崇敬されてきた様々な聖堂・修道院、そしてそこに保管されていたイコンや不朽体といった、キリスト教信仰の拠り所に対する破壊と蹂躪についてである。人的な被害という点でも、修道士・修道女・司祭達についての記録が殆どとなる（ギリシア人とワリヤグ人の追放という記録はあるが）。

陥落の原因やその歴史的意義に関して、本書は互いに立場の異なる諸史料と共通の認識を持ちつつ、それらとは異なる結論に達している。諸帝の諍いと誤った判断、臆病な資質

⁶ クウェラーは、本書がドイツ人司教による報告『ハルベルシュタット司教行状記』に依拠している可能性を主張した D. フライダルクの見解を退け、目撃者による独立史料としての位置づけを改めて行なっている。Queller. *The Fourth Crusade*, p. 221.

⁷ 一例として、井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』講談社学術文庫、2008 年、226 頁。

と無責任な行動、そして十字軍士の貪欲（これについて各著者それぞれに濃淡はある）といった、当事者の判断と行動に関する認識は本書を含め各史料に共通している。ホニャティスはこれらを総括した上で、首都の陥落が人々に対する神罰であるという見解をも同時に示した。⁸ この神罰論は、非難される勝者となったヴィルアルドゥアンの「全ては神の思し召し」という歴史観と表裏一体であり、⁹ 更には1453年のコンスタンティノープル陥落を記したネストル・イスカデル著作や同時代ギリシア・イタリア諸史書の大多数においても引き継がれた陥落原因論・歴史観となった。¹⁰

これに対し、本書は、陥落という事件を「コンスタンディノスの町とギリシアの国は、皇帝達の内争によって滅び、その国をフランク人達が所有することになった」と簡潔に総括している。そこには、後の陥落記録に現れる様な不吉な予兆も、罪深き人々に下された託宣も現れず、神罰の類に関する言及もない。ただこの悲劇がビザンツ人のいわば自滅であるという、事件の核心のみが述べられている。本書は、この事件を正教信仰の本山を襲った惨劇の報告録（これもある種の殉教伝であろうか）であると同時に、東地中海世界における国際政治と軍事事情に関する簡潔な報告書でもある。その報告を通じて本書は、読み手となるロシアの人々に、信仰の絆と国を破壊するのが常にそこに住む人間自身であるという訓戒を伝えることを意図している様に思われる。

⁸ *Choniates*, pp. 573-582.

⁹ ヴィルアルドゥアン『征服記』145, 165, 171, 208 頁など。

¹⁰ ネストル・イスカデル著作における当該の指摘は、三浦清美訳、平野智洋註「1453年のトルコ人によるツァリグラード征服についての物語」『エクフラシス別冊』1, 2014年, 119-159頁, とくに131, 155頁。ビザンツ（ギリシア）人・イタリア人作家による神罰論の一例として、ドゥカスおよびヒオス司教レオナルドによるものを挙げておく。Ducas, *Historia Turco-Bizantina (1341-1462)*, ed. V. Grecu, Bucuresti, 1958, pp. 365-369, 375, 385-391; J. R. Melville Jones (trans.), *The Siege of Constantinople 1453: Seven Contemporary Accounts* (Amsterdam: Hakkert, 1972), pp. 13-16. Cf. M. Angold, *The Fall of Constantinople to the Ottomans: Context and Consequences* (Harlow: (Turning Points) Pearson, 2012), pp. 68-69, 102, 124-126; C. J. G. Turner, "Pages from late Byzantine philosophy of history," *Byzantinische Zeitschrift* 57 (1964), pp. 346-373 esp. 356-358, 363-365, 372-373.

〈翻訳〉

6712年(1204年)ツァリグラードでアレクシオス(3世)¹¹が統治していた。自らの弟、イサアキオス¹²が皇帝であったときに、アレクシオスは自らの弟、イサアキオスの目をえぐり、自らが皇帝となったのである。アレクシオスは、イサアキオスの息子アレクシオス(4世)¹³を高い壁の奥に押しこめ、彼がそこから出られないように見張りを立てた。いくばくかの時間が経つと、イサアキオスは大胆にも自らの息子を牢獄から出してくれるようにと、兄に嘆願しようと心に決めた。イサアキオスは兄を説き伏せ、息子とともに帝位を窺わない旨の宣誓をおこない、牢獄から出され、自由の身となった。アレクシオス帝はイサアキオスとその息子のことを信じ切って、安心していた。というのは、彼らは固く誓いを立てたからである。

そのあと、イサアキオスは心変わりし、皇帝の地位に登りたいと望み、ひそかに書簡を送って自らの息子を焚きつけはじめた。いわく、「私は自らの兄に善を施してやっていた。異教徒に身代金を払って彼を助けたのは私だ。ところが、あの男は私に悪で報いた。私の目を抉り、私の帝位を奪った。」彼の息子は、父親が唆すまますっかりその気になり、何とかこの町¹⁴を出て遠国に逃れ、そこから帝位を狙おうと考えた。彼は船まで導かれ、樽のなかに入れられた。樽は3重に蓋がついており、イサアキオスの息子は仕切りのおく

¹¹ アレクシオス3世アンゲロス帝(1153頃生,位1195-1203)。アレクシオス1世コムニノス帝(位1081-1118)の娘テオドラとコンスタンディノス・アンゲロスの孫。1195年、遠征中の弟の目を潰して自らが帝位に上った。なお、アンゲロス兄弟は帝位登極前の記録が少なく、両者の長幼の序についても諸説あるが、ここではODBの記載に従った。ODB, 64-65.

¹² イサアキオス2世アンゲロス帝(1156頃生,位1185-1195,1203没)。アレクシオス3世の弟。先帝アンドロニコス1世コムニノス帝(位1183-1185)の恐怖政治で親族が粛正されていく中で反旗を翻し、クーデターによって帝位に登極した。しかし統治者・軍司令官としての決断力に欠け、即位翌年の第2ブルガリア独立等、帝国で進行していた諸勢力の離反傾向を押さえることに失敗した。そのため政権内部での不満を招き、遠征中のクーデターで廃位され、目潰しを受けて投獄された。ODB, 1012.

¹³ アレクシオス4世アンゲロス帝(1182/83生,位1203)。イサアキオス2世の息子。同時代ビザンツ史家ニキタス・ホニャティスによれば、伯父には厚遇され、遠征への同道も許されていたが、父の影響で帝位奪回を志すようになった。下記に見るような秘策を用いて国外脱出に成功して義兄・ドイツ王フィリップの許に亡命し、丁度遠征途上にあつた十字軍指導部との面会を行い、自らの帝位獲得の協力と引き替えとして聖地遠征費用の拠出を申し出て協力を取りつけ、十字軍コンスタンティノープル包囲のきっかけを作った。ODB, 65-66.

¹⁴ コンスタンティノープルのこと。Творогов В.О.

に入り、もう片方の側には水が注ぎこまれ栓がしてあった。これ以外の方法で、町から脱出する方法はなかったからである。かくして、アレクシオスはギリシアの国から落ちのびた。¹⁵

このことに気づいた皇帝のアレクシオスは追っ手を差し向けた。多くの場所でアレクシオスの探索をおこない、彼がいた船にも立ち入ってあらゆる場所をくまなく探し、樽の栓を抜いてみたが、そこから水が流れ出るのを見ると立ち去り、彼を見つけることはできなかった。

かくしてイサアキオスの息子は町から脱出し、その姉の夫であるドイツの皇帝フィリップ¹⁶と姉¹⁷のもとにたどり着いた。¹⁸ ドイツ皇帝はローマ教皇¹⁹のもとに遣いを送った。ドイツ皇帝とローマ教皇は次のように命じた。「ツァリグラードと戦わないように。というのは、イサアキオスの息子が『コンスタンティノスの町じゅうの者たちはみな、自分が帝位につくことを望んでいる』と言ったからである。だから、イサアキオスの息子を帝位

¹⁵ アレクシオスが父イサアキオスの使喚を受けて伯父からの離反を決意したこと、そして船底の樽に隠れた脱出したという記述は、ホニャティスのものとほぼ一致する。ただし、本書では水とされている樽の中身について、ホニャティスはバラスト用の砂と記しているうえ、アレクシオスが髪を丸形に刈り込んで変装していたために追っ手が見破れなかったことをも付け加えている。*Choniates*, pp. 536-537. アレクシオスは、反逆者討伐のため、伯父とともにスラキ（トラキア）沿岸都市ダモクラニヤに遠征したのを好機と見て国外逃亡を執行した（注 18 参照）。

¹⁶ ドイツ王フィリップ・フォン・シュヴァーベン（位 1198-1208）。ホーエンシュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝・ドイツ・シチリア王ハインリッヒ 6 世国王（位 1191-1197）の末弟でシュヴァーベン公。兄の死後幼少の甥フリードリッヒ 2 世の後見人を務めたが、従兄弟にあたるヴェルフエン家のオットー 4 世（1208-1215）がローマ教皇の支持を受けて王位を主張したため、甥に代わってドイツ王を宣言し、フランス王フィリップ 2 世尊厳王の支持を受けて勝利した。政策的には兄ハインリッヒの路線を継承して積極的な地中海政策を進め、臣下であるモンフェラート侯ボニファッチョの第 4 回十字軍団長就任と義弟アレクシオス 4 世のビザンツ帝位獲得計画を支援した。神聖ローマ皇帝戴冠の前に再婚問題からライン宮中伯によって暗殺され、王位はオットー 4 世に、その後フリードリッヒ 2 世（1215-1250）にわたった。*ODB*, 1653.

¹⁷ ドイツ王妃イレーネ（1177/1181-1208）。イサアキオス 2 世と最初の妻（名不明）との間の娘で、アレクシオス 4 世とは同母姉にあたる。イサアキオス 2 世は後にハンガリー王ベーラ 3 世の娘マルギト（マリア）と再婚し、一男一女を得た。コンスタンティノーブル陥落後、マルギトはモンフェラート侯（注 70）と結婚し第二代テッサロニカ王となったデメトリオを生んだ。

¹⁸ 1202 年にコンスタンティノーブルから逃げてきたアレクシオスはシチリアに居を定めた。彼は教皇インノケンティウス 3 世、彼の妹結婚していた神聖ローマ皇帝、シュヴァーベンのフィリップと関係を保ち、このときすでにパレスチナへの遠征を準備していた十字軍とも直接連絡をとった。*Творозов B.O.* なおブランド及びケラーによれば、アレクシオス皇子は 1201 年 9 月に伯父の許から逃亡して程なくアンコーナにわたり、そこから義兄のいるドイツへ向かったという（同年 9-10 月）。*C. M. Brand, Byzantium confronts the West 1180-1204* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1968)（以下、Brand, Byzantium と略記）, pp. 228, 275-276; Queller. *The Fourth Crusade*, p. 32.

¹⁹ インノケンティウス 3 世（在位 1198-1216）。教皇権絶頂期の教皇として知られ、第 4 回十字軍の提唱者である他、神聖ローマ皇帝の保護者としてホーエンシュタウフェン家とヴェルフエン家の政争に介入し、ラテラノ教会会議を開催したことで知られる。*ODB*, 996-997.

に即けてやっけてから、その助けを得てエルサレムに進軍するがよい。²⁰ もしも彼を受けいれるのがいやならば、彼を私に送りかえすがよい。ギリシアの国に危害を加えてはならない。」²¹

フランク人²² と彼らのすべての軍勢は、イサアキオスの息子が彼らに約束した金と銀を喉から手が出るほど欲しがり、皇帝と教皇の命令を忘れた。まずスト²³ に入ると鉄の鎖を引きちぎり、町にどっと攻め入り、四方から家屋敷に火をかけた。²⁴ このとき、皇帝アレ

²⁰ (第4回) 十字軍は、イサアキオス・アンゲロスをふたたび帝位に即けてから、パレスチナへの行軍をつづけるはずであった。アレクシオス・アンゲロスはそのさい遠征にたいして財政的な援助をおこなうほか、十字軍に1万の援兵を送る約束になっていた。Творозов В.О. 下記注21も参照。

²¹ ドイツ王フィリップは破門中の身であり、彼と教皇が統一した指令を送ったという本書の記述は明らかな錯誤である。ヴィルアルドゥアンは、この時ドイツ王フィリップが十字軍団長モンフェラート侯に下した、「十字軍は不当に帝位を奪われた先帝と後継者の復権に助力すべきこと、その見返りとして、ビザンツ帝国のローマ教会への服従、遠征費として銀20万マルク(マル)の拠出と軍団への糧食供与、ビザンツ軍1万名の1年間派兵、アレクシオス4世存命中、聖地への騎士500名の常駐とその駐留費支払いが約束される」という指令を伝えている。ヴィルアルドゥアン『征服記』66-67頁。ヴィルアルドゥアンが伝える内容では、軍事力の行使が暗示されているとも言え、本書が伝える指令とはやや趣旨が異なっている。

他方、教皇インノケンティウス3世は1202年11月付のアレクシオス3世宛書簡にて、アレクシオス4世による要請と提案を却下したことを知らせ、アレクシオス3世には十字軍への協力とローマ教会への服従を要求している。また、1203年2月付の十字軍団宛書簡では、ヴェネツィアの要求でアドリア海沿岸のザラ(ザダル)を占領した十字軍に対してザラの返還を命じ、いかなるキリスト教国をも攻撃することを、破門をもって禁じている。The Registers of Innocent III, in Andrea (trans.), Contemporary Sources (Leiden: Brill, 2000), pp. 35-39, 46-48. 本書の指令はこうした教皇書簡からの情報を繋ぎ合わせたものであると見るべきであろう。Cf. ヴィルアルドゥアン『征服記』287-288頁注107, 325-326頁。

²² 中世ロシアにおいてはイタリア人をこう呼びならわしていたが、ここでは十字軍の兵に意味を拡大して用いられている。Творозов В.О. フランク人(Фрязи, Phrangoi, Franks)は西欧人・カトリック教徒を示すビザンツ・ギリシア側の呼称であり、ロシア等正教諸国でも同様に用いられている。ODB, 803-804.

²³ 東からコンスタンティノーブルを取り囲むスト(金角湾)は、防衛上の目的から鉄の鎖がめぐらされていた。十字軍の兵士たちは、彼らの艦船が城壁に迫ることができるように、この鎖を引きちぎったのである。Творозов В.О. スドースダ(Суд-Souda)は原意としては「濠」であるが、ここではコンスタンティノーブル市城壁に併設する濠ではなく、もう一つの意味、「狭水路」から想定される、市北側の金角湾(Keratio kolpos- Chryson Keras, 英名 Golden Horn, 現代ロシア語 Золотой Рог, トルコ名はハリチ Haliç)を示すものと考えられる。ODB, 508.

²⁴ 最初の攻城戦に関して、本書の叙述は極めて概略的である。以下、ヴィルアルドゥアン(『征服記』91-110頁)とクラリ『遠征記』56-65頁)にしたがって戦闘経過を記す。Cf. Brand. Byzantium, pp. 237-241; Queller. The Fourth Crusade, pp. 90-108.

アレクシオス4世を陣頭に立たせることによって首都住民の自発的な受け入れを期待した当初の計画が失敗した後、十字軍はボスポラス海峡対岸のスクタリ(現ウスキュダル)で軍議を開いて作戦決行を決議した。十字軍は1203年7月5日にガラタス地区周辺に上陸し、迎撃に出たビザンツ軍は殆ど戦わずに退却した。続く2日間の戦闘でガラタ斯塔が占拠され、十字軍は金角湾を制圧した。その後7月11日からヴェネツィア艦隊が湾内からの攻撃を、そしてフランク側は陸上からヴラヘルネ地区の城壁への攻撃を開始し、激戦が展開された。7月17日、ヴェネツィア元首ダンドロの指令

クシオスは火の手が上がるのを見ると、彼らに戦いを挑むことをしなかった。²⁵ 自分が盲にした兄のイサアキオスを呼び出すと、彼を帝位に即けて言った。「弟よ、このような仕打ちをしたからには、私を許すがよい。これがおまえの望んだ帝位だ。」²⁶ そして、町から逃げだした。かくして、町と得も言われぬ美しさを誇った教会は焼かれ、その数を数えあげることが私たちはできないのである。歴代のすべての皇帝が描かれていたソフィア聖堂の表玄関²⁷、競馬場²⁸は焼けただれ、街並みは海にいたるまで、皇帝の門²⁹、スドのあたりまで焼け落ちた。³⁰ このとき、イサアキオスの息子はフランク人たちとともに皇帝アレ

でヴェネツィア艦隊が城壁に接岸して飛び移り、城塔を占拠したことで戦況は一変し、守備隊は退却した。アレクシオス3世は城塔奪回の兵を送ったが、ヴェネツィア側が自軍と敵軍との間に火を放った。風がヴェネツィア側から吹いていたためにビザンツ軍は後退し、城塔がヴェネツィア軍に確保された一方、火は市街地へと延焼した（注25, 30参照）。

²⁵ アレクシオス3世は、戦闘を部下に任せたまま自ら長らく宮殿に引きこもり、状況に有効な対策を取っていなかった。彼は十字軍の放火による火災被害に激怒した市民達の非難を受けて仕方なく自ら陣頭に立つことを決意し、首都の騎兵・歩兵軍団を編成して十字軍に相対した。しかしほぼ全く干戈を交えることなく早々に逃走した。*Choniates*, pp. 545-546; クラリ『遠征記』65-66頁。

²⁶ この言葉はアレクシオス3世の見下げ果てた性格と、アンゲロス兄弟の関係を象徴する言葉として諸書で引用されている。たとえば、井上浩一『生き残った帝国ビザンティン』講談社学術文庫、2008年、226頁では、「すまなかった、今日からはまたお前が皇帝だ」。ただし、これは本書の伝える言葉と微妙にニュアンスが異なっている。本書が伝えるアレクシオス3世の言葉は、火災の責任をイサアキオスに転嫁し、自分の罪と相殺することを強要する意味合いで発せられたものである。しかし、アレクシオス3世は、自らの逃亡計画をほとんど誰にも伝えずひそかに、しかも迅速に実行したため、わざわざ兄の許を訪れることはしなかったものと考えられる。実際、イサアキオスを釈放したのは、アレクシオスの逃亡によって取り残された帝国高官・親族たちであった。*Choniates*, pp. 546-547, 549-550. したがって、この言葉と挿話は本書の創作であろう。

²⁷ アギア・ソフィア大聖堂（Святая София, Agia Sophia）は537（562）年献堂の総主教座大聖堂（現在のこの建造物は3代目）であった。表玄関にあったとされる歴代総主教のモザイクについては現在その所在を確認できない。なお、聖別された総主教の何人かはドーム下ティンパヌムに描かれており、聖金口イオアン（ヨアニス・フリソストモス）他一部が残存している。*ODB*, 892-895; *Kidonopoulos V. Bauten in Konstantinopel 1204-1328* (Wiesbaden, 1994)（以下、*Kidonopoulos. Bauten.*と略記）、pp.121-125.

²⁸ 競馬場（подрумье, Ippodromos）は大宮殿に接続する公共競技場であり、皇帝から市民までが一堂に会する場として知られ、新帝の選出においても重要な政治的機能を有していた。この時の火災で西翼が焼失し、陥落後青銅の馬像はヴェネツィア人によって持ち去られ、現在はサン・マルコ聖堂のファサードを飾っている。*Kidonopoulos. Bauten*, pp. 197-199; *ODB*, 934-936.

²⁹ 皇帝の門（Цесаревъ затворъ, Vasiliki pyli）は金角湾に面した門の一つで、ヴラヘルネに近いキニゴス（獵犬）門と同一もしくは隣接のものとみられ、今日のバラト・カプ（Balat Kapı）に比定されている。*Kidonopoulos. Bauten*, p. 48 und Anm. 561.

³⁰ 十字軍による最初の攻撃に際する火災の延焼範囲について、ホニャティスはヴラヘルネ地区から東はエヴェルゲティス修道院、南は第2地区（デフテロン、旧14区）までであるとしている（聖ソフィア・競馬場を含めた旧3区への言及はなし）。*Choniates*, p. 545. しかし、アレクシオス4世が出征した8月19日（注31）に、ムスリム居住区を襲撃した十字軍士・首都駐在ヴェネツィア人・ピサ人の暴徒と首都市民との間に諍いが起こり、暴徒の放火により再度の火災が発生した。この時

クシオスを追いかけてきたが、追いつくことができずに町に引き返した。³¹ そして、父親を帝位から追うと、自らが皇帝の玉座についた。いわく、「あなたは目が見えません。どうして帝位を保つことができるでしょうか。私こそが皇帝です。」³² このとき、皇帝イサアキオスは町のことを、自らの帝国のことを、金や銀を供出した修道院の略奪のことを大いに嘆き、ますます病を篤くし、修道士となってからこの世を去った。³³

イサアキオスの死のあと、町を焼き、修道院を略奪に遭わせたことを咎めて、人々は彼の息子にたいして歯向かった。³⁴ 下々の者たちが集まり、貴顕たちを呼び寄せて、誰を皇帝にしたらよいかを話し合った。みながラディノス³⁵ を皇帝に望んだ。彼は皇帝になるこ

は火勢が聖ソフィアをかすめてプロボンディス（マルマラ海）にまで到達した。*Choniates*, pp. 552-556; ヴィルアルドゥアン『遠征記』124-125頁。したがって、本書の叙述はこの二度の火災を合わせたものであると想定される。Cf. Brand. *Byzantium*, pp. 247-248; Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 119-120.

³¹ アレクシオス3世は首都脱出後、黒海に近いデヴェルトン（デヴェルトス）に北上した後、再び南下してアドリアヌポリスを占拠して帝位奪回を試みていた。アレクシオス4世は十字軍方に1600ケンディナリア（=ポンド）金の支払いを約束した上で1203年8月19日にモンフェラート侯ボニファッチョと共に出撃して（サン・ポール伯ユーグ、フランドル伯弟アンリらも同行）これを打ち破り（捕縛は失敗）、11月11日、東スラキ諸都市を従えてプロボンディス沿岸のキプセラ（現トルコ・イブサラ）経由で首都に帰還し、伯父に与した者達を多数捕えて投獄・処刑を行った。*Choniates*, p. 556; ヴィルアルドゥアン『征服記』123-124, 126頁。クラリは、遠征軍が三ヶ月で帰還した理由を、首都に残留したイサアキオス帝が約束の資金支払いを実行しないことに不満を抱いた首都駐留の他諸侯から呼び戻されたためであるとする。クラリ『遠征記』71-72頁。

³² アレクシオス4世のこの言葉は、他の史書にはないこの作品の独立証言の一つである。他方、ホニャティスはイサアキオスが次第にその権力を息子アレクシオスに奪われていくことに憤慨し、度々息子の資質の欠如などを言い立てたという。実際、アレクシオス4世は少数の友人と共にフランク人達に交わって酒宴と骰子賭博に興ずるなど、皇帝に相応しくない振る舞いが目立った。また、イサアキオス自身も予言に熱中する様になっていた。*Choniates*, pp. 556-558. したがって、親子間の離反と対立そのものは疑いない。

³³ イサアキオス2世の死をめぐる状況は、この1203-1204年の事件の中でも不明瞭なものの一つである。復権後間もなくの、火災による被害等への心労を死因とする本書の記録は、もっとも早い段階での死亡報告といえる。ホニャティスによれば、イサアキオスはまだ息子アレクシオスが政権を奪われ拘束される以前、自身の単独支配復権の予言がはずれたことによる失意から、熱病のような昏睡に落ちて世を去ったという。*Choniates*, p. 562. また、ヴィルアルドゥアンは、ムルツフロスによるアレクシオス4世の帝権剥奪・投獄がイサアキオスの心労と病死の原因になったと述べ（ヴィルアルドゥアン『征服記』134頁）、クラリはイサアキオスが息子のあとで同様にムルツフロスの手にかかったと記している（クラリ『遠征記』77頁）。現在の研究ではヴィルアルドゥアンの記録を採っている。Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 138, 208 n. 52, 210-211 n. 92-94.

³⁴ イサアキオス・アンゲロス1203年6月に帝位に復したが、事実上は彼の息子、アレクシオス・アンゲロス、アレクシオス4世が統治していた。1204年1月に、別の皇帝候補者を立てる動きが活発化したが、このときイサアキオスはおそらく存命中であった。Творогов В.О.

³⁵ 尊厳爵（セヴァストス）コンスタンディノス・ラディノス（Радинос, Konstantinos Radinos）と目される。彼はアレクシオス3世の側近で、ブルガリア君主フリソスードプロミール・ストレツへの

とを望まず、彼らのもとから逃亡して、黒衣の修道士の衣服をまとった。彼らはその妻をとらえてソフィア聖堂に連れてくると、「おまえの夫がどこにいるか、私たちに告げよ」と、力づくで彼女から聞きだそうとした。しかし、彼女は自分の夫について口を割らなかつた。そのあと、ニコラオスという名前の兵士を連れてきて、総主教の叙聖なしにこの男に帝冠を被らせた。³⁶ 6日6晩ソフィア聖堂のなかで話し合いがつづいた。

皇帝となったイサアキオスの息子はヴラヘルネ宮殿³⁷ にいて、貴顕たちには告げずにフランク人たちを町に引き入れようとした。貴顕たちはこのことを知り、皇帝をなだめ、「あなたには私たちがついていきます」と言って、彼にフランク人たちを町に入れさせないようにした。³⁸ このとき、貴顕たちはフランク人を引き入れることを恐れて、ムルツフロス³⁹ と話し合いをおこない、ムルツフロスを戴冠させた。

使節として派遣された記録がある。*Choniates*, p. 507. ラディノス家は小アジア・セマ・アナトリコンの小邑ラディに由来すると見られる家門で、10世紀に初めて歴史上に現れた。Polemis D. I. *The Doukai* (London, 1970) (以下、Polemis. *Doukai* と略記), pp. 171-172. ラディノス擁立の記録は本書にのみ見られる独立証言である。他方、次に擁立されたニコラオス・カナヴォスについて、ホニャティスの記録を参照したとみられる14世紀成立の一短編年代記は、(原史料に不在の)カナヴォスによる尊厳爵保有を記録している。Schreiner P. (ed), *Die Byzantinischen Kleinchroniken (Chronica Byzantina Breviora)*. T. I-III (Wien, 1975-1979) (*CFHB* 12) (以下、*SchreinChron.* と略記), p. 150. これらの証言は、最初の帝位候補ラディノスの名前がビザンツ国内での記録から見失われた後、尊厳爵の称号のみがもう一人の候補者カナヴォスと結びつけられて伝わったという状況を想定させる。

³⁶ ニコラオスを帝位につけたのは一般民衆であり、貴族層の皇帝候補者となったのが、アレクシオス・ドゥカス・ムルツフロスだった。*Творцов В. О.* ニコラオス・カナヴォス (Nikolaos Kan(n)avos, *ODB*, 1101-1102) は首都の青年貴族で、ホニャティスによれば優れた軍人であったという。十字軍を後ろ盾としたアレクシオス4世とアングロス家の統治に不満を抱いた市民達によって、本人は乗り気でないまま聖ソフィア聖堂内で擁立されて皇帝となった。しかし大宮殿の有力者達がムルツフロスを擁立すると支持者がそちらに流れて勢力を失い、逮捕投獄されのちに処刑された。*Choniates*, p. 564; *Schrein Chron.* I. p. 150. ラディノス、カナヴォスの両名擁立(1月25日)の状況については、Brand. *Byzantium*. p. 250.

³⁷ コンスタンティノーブル北東部の城壁沿いに位置する離宮。ヴラヘルネ地区にはこの宮殿の他数多くの聖堂・修道院を擁し、帝国後期には上流市街として繁栄した。現在この地区の宮殿遺構として、13世紀後半に建造されたポルフィロゲニトス宮殿(テクフル・サラユ)が残る。Kidonopoulos. *Bauten*, pp. 150-153, 167-169; *ODB*, 293, 2021-2022.

³⁸ アレクシオス4世は一部市民のカナヴォス擁立で地位が危うくなり、モンフェラート侯と協議して、政権維持のために十字軍の更なる助力が必要であることを確認していた。このことが知れわたると、高官たちは皇帝帝位とムルツフロス擁立を画策しはじめた。*Choniates*, pp. 562-563. ムルツフロスは当座の対策として、皇帝にたいしてこれ以上の支払い、譲歩をやめるように進言した。アレクシオス4世はこの進言を容れて支払い停止を宣告したが、ヴェネツィア元首ダンドロから宣戦布告に等しい激しい言葉を返された。ビザンツ側は明けて1204年1月1日に金角湾停泊中の十字軍艦隊に火船を放って状況を打開しようとしたが失敗し、行き詰まった。クラリ『遠征記』73-75頁; Brand. *Byzantium*, pp. 249-250.

イサアキオスの息子は、このムルヅフロスを牢獄から解放したのだが、そのさい、イサアキオスの息子から帝位を望まないこと、自分を助けることを約束させていた。⁴⁰ ムルヅフロスは、ソフィア聖堂にいるニコラオスと人々に書簡を送って言った。「私はおまえたちの敵、イサアキオスの息子を捕えた。私こそがおまえたちの皇帝だ。ニコラオスは私の貴頭のなかで筆頭者になるだろう。帝冠は外すがよい。」しかし、人々は彼に帝冠を外させなかったばかりか、さらに強硬に主張をした。いわく、「ニコラオスの推戴をやめる者は、呪われてしまえ。」しかしながら、同じ日の夜になると、人々はちりぢりに四散した。ムルヅフロスはニコラオスとその妻を捕えて投獄し、イサアキオスの息子のアレクシオスは監禁し、2月5日に皇帝となり、⁴¹ フランク人たちに制裁を加えようとした。⁴²

³⁹ アレクシオス5世ドゥカス・ムルヅフロス帝 (Μυρτζούφλ, Alexios V Doukas Mourtzouphlos, 在位1204)。ドゥカス姓を名乗っているがその出自は不明である。ムルヅフロスは渾名で、密生し、目まで垂れ下がった濃い眉毛の故に付けられたといわれている。ビザンツ史料では単にアレクシオス・ドゥカスと呼ばれることが多いが、西欧史料や本書では一貫してこの渾名のみでの記録となっている。彼は財務長官(プロトヴェスティアリオス)の任に就いてアレクシオス4世の助言者として振る舞い、のちに皇帝および競合者であったカナヴォスを捕らえて帝権を獲得した。ホニャティスによれば、ムルヅフロスは傲慢で、あらゆる状況を自分が把握せずにはおれない性格であり、他方で賢さと用意周到さも持ち合わせ、戦士としては勇猛果敢であったという。ODB, 66; *Choniates*, pp. 565-566. ヴィルアルドゥアンとクラリは、彼を繰り返す卑劣漢・裏切り者と呼び、彼を打倒して帝都を占領した十字軍の行為を正当化した。ヴィルアルドゥアン『遠征記』133-135, 162, 179-180頁; クラリ『征服記』76-78, 81, 92-94, 120-121頁; Brand. *Byzantium*, pp. 251-252; Polemis. *Doukai*, pp. 145-147; Queller. *The Fourth Crusade*, p. 137.

⁴⁰ クラリ『遠征記』67頁。ムルヅフロスはアレクシオス3世治世下に「肥満漢(パヒス)」ヨアニス・コムニノス(ヨアニス2世の長子アレクシオスの娘マリアの子)の反乱(1201)に荷担して投獄され、十字軍到来まで獄中にあったとみられる。Brand. *Byzantium*, pp. 111, 122-124, 347-348 n. 14. 彼は1月28日深夜、皇帝に危機が迫ったことを告げてあたかも彼を安全な所に逃がすかのように振る舞い、実際には牢獄へ連れて行き足枷を填めて投獄してしまった(本稿注44)。Choniates, pp. 563-564; ヴィルアルドゥアン『征服記』133-134頁; クラリ『遠征記』76-77頁。

⁴¹ ホニャティス及び短編年代記の一つはムルヅフロスの統治が2ヶ月16日であったと記す(他に2ヶ月、70日などの記録もある)。Choniates, p. 571; Schrein *Chron.* I. p. 63. 彼の逃亡が4月12/13日であるので、逆算して1月29日に皇帝宣言が行われたとみられる。本書が記す2月5日は戴冠の日付と目される。Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 132, 209 n. 70. ただしブランドは2月5日を皇帝宣言の日と考えているようである。Brand. *Byzantium*, p. 251.

⁴² ムルヅフロスは帝権獲得後、国庫が空になっていたため、有力者の財産を接収して城壁の修復を行い、十字軍に対する交戦に備えた。Choniates, p. 566; クラリ『征服記』78頁。彼はまた何度か十字軍に小競り合いを仕掛け、その途中で皇帝が出征時に守護者として携帯していた生神女(聖母)のイコンを敵に奪われた。Choniates, p. 567; ヴィルアルドゥアン『征服記』136頁; クラリ『遠征記』80-83頁。Cf. Brand. *Byzantium*, p. 253.

フランク人たちはイサアキオスの息子が捕えられたと知ると、町の周囲を荒らしはじめ、ムルツフロスに自らの要求を突きつけた。⁴³ ムルツフロスとすべての貴顕たちは、彼を生かしたままにしておくことを欲せず、イサアキオスの息子を殺害し、⁴⁴ フランク人たちにはこう言った。「イサアキオスの息子は死んだ。来て自分の目で見るがよい。」⁴⁵ フランク人たちは悲しみに暮れ、ドイツ皇帝もローマ教皇も、ツァリグラードに危害を加えないようにと命じていたのだが、その戒めを破った。フランク人たちは内輪で口々にこう言った。「私たちはイサアキオスの息子とともに来たが、そのイサアキオスの息子もいまはいない。我ら、恥辱を忍んで町を立ち去るよりも、ツァリグラードで死ぬほうがよい。」このときから、彼らは町に戦いを挑むことになった。⁴⁶

⁴³ 帝位宣言に前後して（2月2日前後）、ムルツフロス帝とヴェネツィア元首ダンドロを交渉役とする十字軍陣営の間で和平に関する交渉が行われた。あくまで当初の約束履行を要求する十字軍側と、支払い回避ないし減額を試みる皇帝との折り合いが付かなかつたうえ、突如十字軍の一隊が会を襲撃して皇帝を殺害しようとしたため、交渉は決裂した。ホニャティスはラテン（フランク）人の異常なまでの敵意、ビザンツ・ラテン両者間の不和が、人道的な交渉を不可能にしたと述べる。*Choniates*, pp. 567-568.

⁴⁴ ムルツフロスはヴラヘルネ宮殿のアレクシオスのまえに現われ、あたかも反乱者の手から逃れさせるように、ひそかに宮殿から脱出させた。そのあとで、アレクシオスに枷をはめて投獄し、殺害した。*Творозов В.О.* 下記注 45 も参照。

⁴⁵ ホニャティスによれば、アレクシオス4世の治世は6ヶ月8日であり（*Choniates*, p. 564）、他方ヴィルアルドゥアンは同帝戴冠が1203年聖ペテロの祝祭日（8月1日）であったと記している（『征服記』118-119頁）ので、ムルツフロスによるアレクシオス4世殺害は1204年2月8日のこととなる。ムルツフロスはアレクシオスの毒殺を謀ったが、同帝が解毒薬を飲んでこれを逃れたため、絞殺に踏み切った。ヴィルアルドゥアンによると、ムルツフロスは真相を伏せて病死と触れ回らせ、厳粛な葬儀を偽装したという。*Choniates*, p. 564; ヴィルアルドゥアン『征服記』134頁。なお、クラリはムルツフロスがアレクシオス4世殺害後に父帝イサアキオスにも同様のことにおよんだと記すが、イサアキオスはこの時点ですでに死んでいたとみられる（注33）。クラリはつづけて、まもなくビザンツ人のあいだで先帝弑逆の情報が流れ、つづいて十字軍陣営に一件を伝える矢文が打ち込まれたこと、その後ムルツフロスより十字軍指導層に向けて、一週間以内に当地から退去するようとの、武力行使を含めた勸告が伝えられたことを記している。クラリ『遠征記』77頁。また、投獄されていたカナヴォスも恐らくこの頃に斬首されたとみられる。Cf. Brand. *Byzantium*, p. 251; Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 136-137.

⁴⁶ 十字軍諸侯及びヴェネツィア要人達は評議を開いて、ムルツフロスの主君弑逆を許すべからざる暴挙と非難し、これにたいする攻撃は正当であると断じ、十字軍同行の聖職者達もこれに同調した。「この戦いは、道理と正義にかなうものでございます。当地を掌握したうえはこれをローマに帰服せしめるように心正しくつとめるならば、懺悔に身を清めて戦さに斃れる者総て教皇よりお達しのとりの免罪を得られるであります。」ヴィルアルドゥアン『征服記』134-135頁；クラリ『遠征記』77-78頁。この時、皇帝選出の手続きと旧ビザンツ領分割を含めたコンスタンティノーブル占領後の処置についても協定がなされた。分割協定は、新皇帝がヴコレオン宮殿—大宮殿及びヴラヘルネ宮殿、更に首都内及び首都外領土の各1/4を直轄地として獲得し、残る3/4をヴェネツィア人と十字軍士で折半（即ち3/8ずつを領有）し、あらためて皇帝からの拝領（授封）地とすることを決

彼らはまえと同じように奸計を用いた。彼らは強襲のための帆船を用意し、別の船には破城用の槌と縄はしごを具え、⁴⁷ もう一方の船からは、城壁ごしにタールの入った樽を投げこめるように準備した。彼らは、木切れで樽に火をつけると、樽をつぎつぎと家々に向けて投げつけ、まえの時と同じように町を焼こうとした。攻撃をはじめたのは4月9日、大齋期の5番目の週の金曜日であった。しかし、町には何ら損害をあたえることができず、100人のフランク人が戦死した。⁴⁸ フランク人たちはこの場所に3日間とどまり、⁴⁹ 柳の週⁵⁰の月曜日、太陽の昇るころ、ヴェルゲティスという名の聖救世主教会、⁵¹ ピギ街道門⁵²の城壁に進軍し、さらにヴラヘルネ宮殿へと兵を進めた。彼らは40隻の大船⁵³で町に迫っ

定したという。ヴィルアルドゥアン『征服記』139-140頁；クラリ『遠征記』83-84頁。より詳細な協定内容については、Queller. *The Fourth Crusade*, p. 139; ヴィルアルドゥアン『征服記』297頁注234。

⁴⁷ 十字軍の艦船は帆げたに縄梯子を垂らし、そこから兵士たちが行き来し、要塞の城壁に取りつくことができるようにしてあった。Творозос В.О. 十字軍船団はプロウ伯ルイ・ヴェネツィア元首ダンドロの指導下に投石器・破城槌等の装備を整えた。Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 139-140.

⁴⁸ 十字軍は4月9日の夜明けを待って金角湾側を中心に総攻撃を繰り出した。ムルヅプロス帝はハリストス・パンデポプティス修道院 (Kidonopoulos. *Bauten*, pp. 28-30) 附近に幕営を置いて迎撃の指揮を執った。攻撃側は城壁手前に上陸した部隊と、船の舷側に留まった部隊による二方向からの攻撃を試みた。しかし防衛側は城壁及びムルヅプロスが設営した木塔からの投石によって攻撃隊に被害を与え、また南風によって船が城壁から戻されてしまった為に十字軍は敗退した。Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 141-142. この時の戦死者について、ホニャティスもヴィルアルドゥアン・クラリともに具体数は挙げていない。

この日の敗退は十字軍側に精神的動揺をもたらした。敗退は神罰であるという悲観論に対し、従軍司教・修道院長達は繰り返し対ビザンツ攻撃の正統性を主張した。これはコンスタンティノープル攻撃を繰り返し禁じた教皇インノケンティウス3世の意向(注21)に背くものであったが、遠く離れた異国の地で彼らは自らの判断を押し通し、そして後日の正当化が可能であると考えていた。

Brand. *Byzantium*, pp. 254-255; Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 142-143.

⁴⁹ 4月9日の攻撃側敗退、4月12日の再攻撃による突破という状況について、本書の叙述は概ね他史料との整合が取れ、正確である。10、11日に十字軍が戦闘行動を起こさなかったことについて、ホニャティスは主日(土日)であったことを理由として挙げる。Choniates, p. 569. ヴィルアルドゥアンは9日夕刻に作戦会議が開かれ、最終的に戦力を整えるのに2日かけ、月曜日に総攻撃を再開することを決議したと記す。ヴィルアルドゥアン『征服記』143-144頁。Cf. Brand. *Byzantium*, p. 254; Queller. *The Fourth Crusade*, p. 143.

⁵⁰ 大齋期の最後の週。Творозос В.О.

⁵¹ エヴェルゲティス修道院 (Вергетисъ, moni tou Evergetou) 或いは恩恵者救世主ハリストス修道院 (moni tou Sotiros Christou tou Evergetou) は、恩恵者としてのキリストに捧げられた修道院。金角湾側城壁と、旧コンスタンティヌス城壁の接続地点に建てられていた。Kidonopoulos. *Bauten*, pp. 25-28.

⁵² イス・ピガス(ピギー泉方面)門(Испигас, eis Pigas)は金角湾に面した、エヴェルゲティス修道院近在の門で、現在のヅィバリ・カプシュ(Cibali Kapısı)と同一と見られる。陸側大城壁にあるピギーピゲ(泉)門(Pigai, シリンヴリア門, 現シリヴリ門)とは別のものである。Kidonopoulos. *Bauten*, p. 28.

⁵³ この時の十字軍の海軍兵力に関して、ホニャティス、ヴィルアルドゥアンとクラリには具体的な数値の言及はない。ホニャティスは出発時点での十字軍の海軍兵力について、ドロモン船110隻、60隻の長型艦艇(帆船)、及び70隻の大型艦艇と記す。Choniates, p. 539.

てきたが、そのなかにはドロモン船⁵⁴もあり、そこには鎧兜に身を堅めた騎馬の戦士、馬が積まれていた。フランク人たちは、火が移るのを恐れて、ほかの艦船やガレー船を後衛に置いた。ヴァシリオスの日の深夜、前回の時と同じように、ギリシア人たちは帆がよい風をはらんだのを見計らって、10隻の船に火を放ってフランク人に差し向けたが、フランク人たちに損害をあたえることはできなかった。イサアキオスの息子はギリシア人たちには船をフランク人に差し向けるように命じていたが、同時にそのことを事前にフランク人たちに知らせていたので、フランク人の船は燃えなかった。⁵⁵

かくのごとくして偉大なるコンスタンティノーブルは陥落したのである。艦船は風に乗って城壁に迫り、城壁より高い巨大な梯子が立てられ、また、短い梯子が胸壁に架けられ、フランク人たちは高い梯子のうえから、ギリシア人や城壁を守っていたヴァリャグ人たち⁵⁶に矢を射かけたり、石や槍を投げた。短い梯子からは、兵士たちが城壁に飛び移った。⁵⁷かくのごとくして町は陥落した。皇帝ムルヅフロスは貴顕やすべての人々を励まし、フランク人たちと一戦交えようとしたが、誰も彼のいうことを聞かなかった。みなは彼のもと

⁵⁴ ドロモン（快速）船（дромоны, dromon）はビザンツ帝国で多用された、帆と櫂（二段）を装備した高速戦闘艦。全長約40m、幅員5.5m、乗員数は大型艦艇で230名ほど、小型のもので100名ほどであった。木造艦橋を備え、兵装として「ギリシア火」発射装置と弩砲を搭載していた。ODB, 662.

⁵⁵ この部分の叙述は不分明な点がある（既に殺されたはずのアレクシオス4世への言及など）。ここで描写されるビザンツ側の火船突撃作戦について、ヴィルアルドゥアンは1月1日の軍事衝突の際に火船突撃が実行され、ヴェネツィア艦隊の乗組員達が鉤で船を曳航して湾外に引きずり出すことで十字軍艦艇への被害を免れたと記す。ヴィルアルドゥアン『征服記』130-132頁。また4月12日の総攻撃においては、戦闘開始後しばらくして北風が吹き寄せたため、十字軍艦艇が城壁に勢いよく接近し得たという。同145頁。

⁵⁶ ヴァリャグ（ヴァランギ）人（варяги, Varangoi）はスカンジナビア出身の傭兵で、ルーシも含められる様になり、さらに11世紀後半以降はアングロ・サクソン系の人々も含むようになった。戦斧での武装を以て言及されることが多く、野戦軍・宮殿警護部隊の双方で重用された。ODB, 2152.

⁵⁷ 途中まで守備隊優勢であったこの日の攻防戦は、ヴェネツィア人の一人とフランス王領出身の騎士アンドレ・デュルボワーズなる者が城塔への一番乗りを果たし、十字軍随一の勇者と謳われた巨漢ブラシュエのピエールが城塔を占拠制圧したあと、学僧アローム（クラリの弟）が城内への突入を煽動してピエールとその部下がつづいた結果、十字軍側の優位に変わった。ヴィルアルドゥアン『征服記』145-146頁；クラリ『遠征記』90-93頁；Brand, *Byzantium*, pp. 255-256; Queller, *The Fourth Crusade*, pp. 144-145. ピエールの突入と奮戦に関してはホニャティスにも言及がある。彼の姿は、ホメロス『オデュッセイア』（11. 312）を引きつつ「背丈9尋（オルギイア, 19. 53m）の巨人」と記すが、恐らく実際の身長1尋（オルギイア/orgyia = 2. 17m）を書き換えたものであろう。ピエールを見て、守備隊が意気阻喪したと伝えている。なお、計測単位としての「尋」については二種類の長さが存在しているが、ピエールが2mを越える巨漢であったという記録を考慮して長い方の単位を記している。Choniates, pp. 569-570.

から逃げ去った。⁵⁸ このとき、皇帝はフランク人のもとから逃げたが、馬市場⁵⁹ で見つけられた。彼は貴顕やすべての人々について不満をたらたらと述べた。そして、皇帝も総主教もすべての貴顕たちも町を立ち去った。⁶⁰

すべてのフランク人たちは、4月12日、告解者ヴァシリオスの日の月曜日⁶¹ に町に入場し、ついさっきまでギリシアの皇帝が立っていたまさにその場所、聖救世主教会⁶² に立ち、そこで夜を過ごした。翌朝、太陽が昇るころ、フランク人たちは聖ソフィアに侵入し、扉⁶³ を剥ぎとり、その扉、全体が銀で覆われていた高壇、12本の銀の柱、4つの聖像入れを打ち砕いた。イコノスタスと至聖所のうえにあった12本の十字架をばらばらに折りひしんだ。そうした十字架のなかに、男の身長ほどもあるものもあった。柱のあいだにあった至聖所の壁も打ち壊した。こうしたものはすべて銀製であった。すばらしい奉献台も引きはがし、宝石と大きな真珠もめぐり出し、宝物をどこに隠してよいかわからないほどであった。

至聖所のまえにあった40個の大きな器、大燭台、数え切れないほどの銀製の燭台、値段のつけようもないほど価値の高い祝日用の器が強奪された。奉神礼のための福音書、尊い十字架、貴重なアイコン、こうしたものがすべて強奪された。宝座のしたに隠し場所を見つけ出した。そこには、40の小箱に収められた純金があった。聖堂の聴衆席にも、壁面

⁵⁸ ビザンツ軍はヴラヘルネ宮殿周辺の塔が占拠されたことを機に、なお撃退可能な勢力と地形上の優位を維持していたにも拘わらず意気阻喪して次々に後退しはじめた。ムルツフロスは自軍の再編を試みたが、早々に諦めて自らも逃亡を図り、大宮殿に戻って当時愛人関係にあった（後に結婚）アレクシオス3世の娘エヴドキア及び少数の供回りを連れ出すと、小舟に乗って都を脱出してしまった。*Choniates*, pp. 570-571. ムルツフロスの逃走経路について、ホニャティスの記述（小舟に乗って海路）とヴィルアルドゥアンの記述（黄金門を密かにくぐり抜けて陸路）のあいだには、矛盾が見られる。*Choniates*, pp. 570-571; ヴィルアルドゥアン『征服記』147頁。ブランド、クエラー共にヴィルアルドゥアンの記録により陸路説を採っている。*Brand. Byzantium*, p. 257; *Queller. The Fourth Crusade*, pp. 146-147, 216 n. 82.

⁵⁹ この馬市場（Коньнемь търгу）にかんしては所在不詳。

⁶⁰ ムルツフロス逃亡後、市に残っていた者たちは、くじ引きで青年貴族コンスタンディノス・ラスカリスを皇帝として選出したが、ラスカリスは戴冠を拒否しつつ、残存勢力の糾合と抵抗の継続を試みた。彼は広場に行きビザンツ人とヴァランギ兵に戦闘継続を訴え、彼らも表向きは同意した。しかしそれは言葉だけで、全員が即座に逃げ出した。*Choniates*, pp. 571-572.

⁶¹ 克肖者表信者ヴァシリオス（ワシリイ、Васили Исповѣдник, osios Vasileios o Omologitis, 750年没）の祭日（記憶日）は3月13日であるので、実際には1ヶ月のずれがある。

⁶² 救世主ハリストス聖堂（Святого Спаса, naos tou Christou Sotiros）。救世主の名をもつ聖堂・修道院は、大宮殿付聖堂、ボスポラス海峡側突端に位置する救世主ハリストス・クラテウ修道院のほか、コンスタンティノーブル市内に数カ所存在した。ここで言及されるのは、大宮殿付聖堂ないし上記のエヴェルゲティス修道院と思われる。*Kidonopoulos. Bauten*, pp. 16-18, 33-37, 57.

⁶³ 聖堂の扉は、銅やその他の貴金属で覆いがかけられており、彫刻がほどこされていた。*Творогов В.О.*

にも、器を保存する場所にも、数え切れないほどの金、銀、高価な器があった。⁶⁴ 私がここで述べるのは、ソフィア聖堂だけである。ヴラヘルネにあり、毎週金曜日になると聖霊が降りてくるといふ聖なる神の御母の聖堂⁶⁵ もやはり略奪に任された。ほかの教会にかんしては、どれほどの損害を被ったか、人間が数えあげることにはできない。教会の数には限りがないからである。⁶⁶

かつて町を練り歩いたことのある、神の御母の賛嘆すべきオディゴトリア⁶⁷ のイコンは、よき人々を用いて神がお守りになり、いまも現存しており、私たちはそのイコンに望みをかけている。町のなかにあるといわず、外にあるといわず、そのほかの教会と修道院はすべて略奪にあった。私たちはその数を数えあげることにはできないし、その美しさは名状に尽くしがたかった。黒衣の修道僧たち、尼僧たち、司祭たちも身ぐるみ剥がれ、そのうち

⁶⁴ 当時の聖ソフィア堂内の祭器・宝飾品については、「略奪者」の立場となったクラリも記録を残している。クラリ『遠征記』100-101頁。

⁶⁵ ヴラヘルネのセオミトロス（生神女）聖堂（Святая Богородица на Влахѣрнѣ, naos tis Theomitos en Vlachernais- ton Vlachernon），別名「セオトコス・ヴラヘルネオティサ聖堂」は広く崇敬を集めていたヴラヘルネ地区の聖堂（共に生神女を意味する）。聖堂は1434年に失火で焼失した。Kidonopoulos. *Bauten*, pp. 129-131; *ODB*, 293.

⁶⁶ 不朽体（聖遺物）の略奪と西欧への移送に関しては、Brand. *Byzantium*, pp. 260-269. ヴィルアルドゥアン、クラリとも教会ばかりでなくその他世俗地区からも大量の戦利品が獲得されたことを述べている。ヴィルアルドゥアンの試算によればヴェネツィア側の取り分（全体の3/4）や隠匿分を除いて戦利品の価値は銀40万マル相当であり、「天地開闢以来これ程の戦利品を獲られたためしはない」と誇らしげに綴り、またクラリは「世界の富の三分の二がコンスタンティノープルにある」というビザンツ人の言葉を引きつつ、それらが自分達のものになったと語る。戦利品は事前の協定（注46）により一箇所に集積された後にその身分や功績に応じて分配される取り決めとなっていたが、隠匿や着服をする者も後を絶たず（ヴィルアルドゥアン／クラリ）、他方で身分の低い者には満足な分配が為されず大きな不満が残されたという（クラリ）。ヴィルアルドゥアン『征服記』148-152頁；クラリ『遠征記』95-96, 112-113頁。

⁶⁷ 万聖生神女オディゴトリア（Дигитрия, Odigitria, 導きの女主人）は、幼子キリストを抱きかかえながら見る者に道筋を示す生神女（聖母マリア）の姿を描いたイコンで、正教世界で広く崇敬されていた。ここに言及されるオディゴトリア・イコンは、ボスポラス海峡沿いに立つ同名の修道院に所蔵されていたイコンで、コンスタンティノープルが敵軍に包囲されるたびに持ち出され、加護を求めて人々が集まり練り歩いたと伝えられている。Kidonopoulos. *Bauten*, pp. 77-78; *ODB*, 2172-2173.

のある者たちは打ち殺された。⁶⁸ 町に残っていたギリシア人とヴァリャーグ人たちは、町から放逐された。⁶⁹

彼らの軍司令官たちの名前は以下のとおりである。ローマから来たヴェローナの辺境伯。⁷⁰ ヴェローナにはかつて残忍なる異教徒テオドリク⁷¹ が住んでいた。2人目は、フランドル伯。⁷² 3人目は、ヴェネツィア、マルコ島⁷³ の盲目の総督。⁷⁴ 皇帝マヌイル⁷⁵ がこの総

⁶⁸ 十字軍による首都市民への人的被害について本書が言及するのは、この箇所のみである。ヴィルアルドゥアンは市内突入を果たした十字軍兵士が略奪と殺戮を働いて多数の死者・負傷者が出たことを記す。ヴィルアルドゥアン『征服記』145-146頁。西欧側記録者の一人ギユンター・フォン・ペリスによると、この時の犠牲者は2,000人ほどである。Brand. *Byzantium*, p. 259. ホニャティスは、首都になだれ込んだ十字軍士による無差別殺戮、暴行、略奪、破壊といった凄惨な蛮行について事細かに記す。Choniatas, pp. 572-577, 586-595.

⁶⁹ ビザンツ人の有力者は、陥落の混乱の中で多くが逃亡していた。クラリは、貧富を問わず住民に対して危害が加えられたことはなく（この点は虚偽ないし誤認一注 68）、退去も残留も自由であったと記す。クラリ『遠征記』95頁。

⁷⁰ ヴェローナ出身のモンフェラート侯ボニファッチョ（маркосъ Върне, Bonifacio del Monferrato, モンフェラート侯9世、在位1193-1207/テッサロニカ王1世、在位1204-1207）。母はオーストリア公国バーベンベルク家の出身でドイツ王フィリップとは従兄弟の関係にあり、イタリアの皇帝派（ギベリン、親ホーエンシュタウフェン派）として彼を支持した。兄コッラド（*ODB*, 495）はマヌイル1世の同盟者としてビザンツ帝国で軍人として活躍、後にエルサレム王国にわたり第3回十字軍にも参戦した。1192年エルサレム王に推挙されたがアラブの暗殺者によって命を落とした。末弟ラニエリ（*ODB*, 1784）はコムニノス家の女性と結婚して同様にビザンツ宮廷で高官となったが、マヌイル帝の従弟アンドロニコス1世によって殺害された。ボニファッチョは十字軍の軍事指導者となるはずであったシャンパーニュ伯の急死に伴い、フィリップからの推挙を受ける形で十字軍司令官に就任した。コンスタンティノープル征服後、ラテン皇帝の地位をフランドル伯と争ったがヴェネツィア元首ダンドロの介入で果たせず、代わって封地としてセサロニキを要求し、ここにテッサロニカ王国（地名としてのセサロニキは中世ギリシア語のカナ転写。王国としてのテッサロニカはラテン語のカナ転写）を建国した。主君であるボードゥワン帝とは西スラキ・東マケドニアの分配等、複雑な関係にあった。彼は皇帝の封臣であると同時に自らもまた王としてバルカン南部諸侯、アテネ公やアカイア公らの臣従を受けた。1207年、自領の東端にあたるモシノポリス周辺を巡幸中にブルガリア王カロヤンの急襲を受けて戦死。*ODB*, 304-305.

⁷¹ 東ゴート王テオドリク大王（Дедрикъ, Theodoric, 在位493-526）。旧西ローマ帝国領イタリアとダルマティアをオドアケルから奪って自らの王国を建国した（その中心地はラヴェンナであり、ヴェローナではない）。宗教的には（本書が述べるような）「異教」ではなくアリウス派を採用したため、旧来のローマ支配層とは緊張関係にあった。本書での否定的な記述は、正統信仰者としての観点を強く反映したものと言える。*ODB*, 2049-2050.

⁷² フランドル伯ボードゥワン（кондофъ Офландръ, Baudouin de Flandre）、伯として同9世、ラテン皇帝同1世（位1204-1205）。シャンパーニュ伯ティボー3世、プロワ伯ルイやサン・ポール伯ユーグラとともに十字軍結成の中心を担い、帝都陥落後はヴェネツィア元首ダンドロの支持を得て初代ラテン皇帝に選ばれた（ボードゥワン1世）。国内的にはビザンツ（ギリシア）人の抵抗、モンフェラート侯一派との対立を抱え、対外的には小アジアではニケア皇帝セオドロス・ラスカリス（位1206-1222）との、バルカンではブルガリア王カロヤン（1197-1207）との二正面作戦に苦慮することとなった。1205年、アドリアヌポリス（エディルネ）をめぐるカロヤンと戦い、捕虜となってタルノヴォに連行された後殺害された。帝位は弟アンリ・ド・エノー（位1206-1216）が摂政を務めたあとに継承

督を盲にした。なぜなら、多くの賢者たちが皇帝にそうするように示唆したからである。いわく、もしもこの総督を無傷のまま返せば、そなたの帝国に多くの悪をなすだろう、と。皇帝は、彼を殺したくなかったので、ガラスを使ってこの男を盲目にするよう命じた。彼の目は無傷のように見えたが、彼は見るということができなくなった。⁷⁶ この総督はこの町にたいしてつねに姦策を企み、すべての者たちはその言うことにしたがった。多くの船をもっていたが、町はその船によって征服されたのである。12月から町が征服される4

し、彼の手でラテン帝国の勢力確立が果たされた。ラテン帝国は、コンスタンティノーブルとその周辺、マルマラ海の南岸、ギリシアのいくつかの地方を支配した。ODB, 247-248.

⁷³ ヴェネツィアは、その守護聖人である使徒マルコにちなんで、聖マルコの共和国と呼ばれていた。Творогов В.О.

⁷⁴ ヴェネツィア元首（総督）エンリコ・ダンドロ（дужь Венедикъ, Enrico Dandolo, 1107頃生、在任1192-1205）。元首就任以前、1172、1184年の二度にわたりコンスタンティノーブルに使節として訪問していた。元首就任時既に80歳を、十字軍の時には90歳を越えていたが、なお精力は衰えず十字軍の出資者として指導的立場を担った。艦隊を用いて帝都を攻略する作戦の立案と遂行は彼の手腕に拠る所が大きい。更に、彼の手腕は陥落後の新帝選出、領土・財産分配に対して更に巧妙さを発揮した。彼はヴェネツィア領として旧帝国領土の3/8（主としてエーゲ海の諸島）を確保し、しかもラテン皇帝への臣従義務からも除外させた。これらの功績によって、ヴェネツィアは以後17世紀まで続く海洋国家としての基礎を獲得した。ODB, 583.

また、十字軍に於ける彼個人及びヴェネツィアの役割を（主にヴェネツィア年代記集から）考察した近年の論考の一つとして、S. Marin, “Between Justification and Glory: The Venetian Chronicle's view of the Fourth Crusade,” in T. F. Madden (ed.), *The Fourth crusade: event, aftermath, and perceptions: papers from the Sixth Conference of the Society for the Study of the Crusades and the Latin East, Istanbul, Turkey, 25-29 August 2004* (Aldershot: Ashgate, 2008), pp. 113-121 を挙げておく。

元首（*doge*）は「統領」「総督」とも訳されるヴェネツィア国家元首職で、元々はビザンツ帝国によって同地の行政官として任命された「公」（*doux*）に由来する。

⁷⁵ マヌイル1世コムノス帝（Мануиль, Manouil I Komninos, 在位1143-1180）。アレクシオス1世、ヨアニス2世に続くコムノス朝の三代目君主として、バルカン・小アジア世界での勢力拡大に努めるとともに、積極的に西欧世界との接触を図りイタリアへの進出を企て、ダルマティアをめぐるハンガリー王国と競合した。彼の治世下、数多くの西欧人—「ラテン/フランク人」がコンスタンティノーブルを訪れ、帝国の官職を得た。このことは、西欧におけるビザンツ世界の富に対する憧憬をかき立てるとともに、ビザンツ住民の西欧人にたいする警戒感や排外感情を高める遠因ともなった。P. Magdalino, *The empire of Manuel I Komnenos, 1143-1180* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993); ODB, 1290-1291; 根津由喜夫『ビザンツ 幻影の世界帝国（講談社選書メチエ154）』講談社、1999年。

クラリは自らの征服記のなかで、マヌイル帝の治世下に叙述をさかのぼらせるが、それは上記の接触・交流・反感・対立といった要素が十字軍の帝都攻撃の背景であると考えているからにほかならない。クラリ『遠征記』29-32頁。そして、この歴史観は、マヌイル帝とダンドロの因縁にさかのぼる、この作品においても共有されている。

⁷⁶ マヌイル1世によるガラス（レンズないし凹面鏡）を用いたダンドロ目潰しの一件に関する真偽は不明（ODB, 583. Magdalino. *Manuel I* には言及なし）。ヴィルアルドゥアンは、頭部に受けた怪我の影響で目が見えなくなっていたと記す。ヴィルアルドゥアン『征服記』51頁。Cf. Queller. *The Fourth Crusade*, pp. 9, 162 n. 4.

月まで、フランク人は、ツァリグラードにいた。5月9日に司教たちの決定によって、ラテン人であるフランドル伯を皇帝に据え、自分たちのあいだで所領を分配した。⁷⁷ 皇帝にはこの町を、辺境伯にはスドを、総督には10分の1税があたえられた。⁷⁸ かくのごとくして神に守られるコンスタンティノスの町とギリシアの国は、皇帝たちの内争によって滅び、その国をフランク人たちが所有することになった。

⁷⁷ ヴィルアルドゥアンによれば、まず、皇帝選出を決定する選挙人を選出する会議が5月2日に選ばれ（フランク側6名、ヴェネツィア側6名）、彼らによって5月9日、ボードゥワンの皇帝選出が行われ、選挙人を代表してソワソン司教ニヴロンが結果を発表した。フランク側の皇帝選挙人は司教5人とルチェディオ修道院長からなり、全員が聖職者であった（ヴェネツィア側は総て在俗の人）。彼は5月16日に聖ソフィアにて戴冠式を挙行した。ヴィルアルドゥアン『征服記』154-156頁。より詳細な選出状況および各陣営の思惑等については、同302頁注258、302-303頁注260。

⁷⁸ 帝国分割協定（注46参照）は1204年9-10月に文書『ローマニア分割表』（*Partitio Romaniae*）として発給され発効した。ODB, 1591-1592。皇帝は帝都の全域ではなく1/4が割り当てられた。モンフェラート侯への金角湾割り当てについては不明。ヴェネツィア人に十分の一税が与えられたという記述は、彼らがコンスタンティノーブル・ラテン「総大司教」の被任命権を占有したということの婉曲的表現であろう。分割協定のなかに、フランク・ヴェネツィア側のうち一方が皇帝の被任命権を、もう一方が総大司教の被任命権を有するという事項があった。皇帝がフランク人の一人ボードゥワンであったので、総大司教はヴェネツィア人のなかから選出されることとなったのである。ヴィルアルドゥアン『征服記』297頁注234、302頁注256、311-312頁注368。

こののちヴェネツィア人は、ローマ教皇の承認を経ずに副助祭トンマーゾ・モロジーニ（在任1204-1211、ODB, 2077）をコンスタンティノーブル（・ラテン）総大司教に選出し、のちに教皇側からの追認を得た（1205年1月21日付書簡。モロジーニをローマに召喚して助祭、司祭、司教、大司教昇格の手続き後、同年3月に改めて教皇が任命・派遣する形式が採られた）。Choniates, p. 647; *The Registers of Innocent III*, in Andrea (trans.), *Contemporary Sources*, pp. 132-139, 140.